

---

# 落ちていたのです

徒然花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

落ちていたのです

### 【Nコード】

N2704BA

### 【作者名】

徒然花

### 【あらすじ】

塾からの帰宅途中、音々 ねね の目の前に、唐突に彼は落ちていた…。

ヴァンパイアの朔 さく との出会いは怪しすぎて。

そんなわけのわからない出会いをした音々と朔のラブコメです

## 遭遇

とつても唐突に。

ものすごく不自然に自然に、彼は落ちていたのです。

私、三谷音々　みたにねね　、高校1年生、16歳は、帰りを急いでます。

今日は塾があつたんだけど、ちょっと遅くなつてしまつて、もう8時。別に危ない夜道でもない。駅から徒歩10分。大半は幹線道路沿いの明るい道で、最後の3分ほど住宅街を行くんだけど、新興住宅街だから街灯もばつちり。家の明かりもまだまだ点いてるしね。だけど、異変はほんとに突然目の前に落ちてた。

自宅の3軒隣。坂田さんちの前に『彼』が落ちてた。っつーか、行き倒れてた？

街灯だけだからなんとなくかわからないけど、黒いマントみたいなのを着た、茶髪の子。

うつ伏せだから顔はわからないけど、多分『彼』だと思う。『彼女』っていう体格でもないし。

とりあえず、見えてないことにしよう。怪しい人にしか見えないし。今時、マントなんて着ないよね…。季節だつて夏の終わりだし。絶対めんどくさいことになる。

本能からの警告に素直に従つて、私はできる限り離れたところを通り過ぎようとしたのに、

「おい。」

つて声をかけられた。いやー！私に言つてんの？いや、違つよね。私じゃないよね。うん、そうだ。

どう見ても周りに人なんていない状況で、軽く逃避思考。

完全無視を決め込んで、これまた聞こえないふりして歩を進めよう

としたら、

「おいこら。」

と、また声をかけられる。

あーもう、私ですかあ？絶対無視よ、無視！

「さつきから呼んでんだろ。聞こえねーのかよ。」

と、幾分イラついた声が聞こえてきた。

もうっ。知らん顔したかったのに！おかしな人にはかかわっちゃいけないのよ！知らないの！？

さすがにもう聞こえないふりは無理なので、

「…なにかご用でしょうか？」

渋々返事してみた。

「ここに人が倒れてて、お前は無視して通り過ぎんのかよ？助けようとかしねーか？ふっー。」

背中越しに不機嫌そうな声が飛んでくる。まだ彼に背を向けたままの私だったけど、仕方なく彼の方へ向き直った。

彼はすでに起き上がっていて、胡坐をかいて地面に座っていた。

行き倒れてたんじゃなかったのかよっ！とっっこみそうだったけど、もういい。流そう。

「いや、何分おかしな人にしか見えなかったので、関与した暁にはどうなることかと考慮しまして、見えないことにしたのでございませう。」

もうちょっと齒に衣着せたほうがいいかなーなんて、これっぽちも思わなかった。

すると彼はむっとしながら、

「こんなカツコイイ不審者がいるか！！」

と、ほざいてくれた。不審者にかっこいいもかっこ悪いも関係ないでしょ。

「そこに。」

じと目で彼を見据えつつ、私は彼を指さしてあげた。

カツコイイって、自分で言ってるよ。この人。

さつきまではうつ伏せてたからよくわからなかったけど、起き上がった顔を見たら、まあ、なるほど、自分でも言い放つくらいカッコイイ男の子だった。

さらさらとした茶髪、きりっとした目、すつと通った鼻筋、薄目の唇。細面の面立ち。どれをとっても、総合してもカッコイイとは言える。でも、この状況は怪しすぎるでしょ。

「怪しいとしか表現できない感じですよ？と言っわけ、さようなら。どこか違うところで倒れなおしてください。」

そう言っつて、家に逃げ込むことにした。あー、でもこれって家がばればれだよなあ。困ったなあ。あ、ケーサツさん呼ぼうか。そうだ。おもむろにケータイを取り出す。

「なにすんだよ？」

「あ、とりあえず通報なんてしてみよっかなって思いました。あ、いえ、すぐさま退散してくださいさるならしませんけど？」

「通報っつて……。しかしお前、えらく冷静だよな。」

「いえ？充分パニックってますよ？で、退散しないんですか？」

「わかったよ。とりあえず、今日のところは退散するよ。」

「じゃあ、今日のところはって言わずに、二度と来ないでください。さようなら。」

「……」

彼は半目で私を見つめていたけど、しびしび移動してくれるみたいだったので、とりあえず、笑顔で見えなくなるまでお見送りしてみる。よし、角曲がったな。

でも、油断するまい。

……… 5分。よし、大丈夫だろ。

やっと家に入れた。

あーもう、なんだったんだろ。

すぐさまお風呂に入って、それからやっとお夕飯にありついて、一息。

あれは絶対変質者だね。今時マントなんて誰も着やしない。

「なーに？音々。ぶつぶつ独り言なんて言つて。気持ち悪い。」  
お母さんに突つ込まれた。

「いや、ほんの独り言。」

「音々、勉強しすぎでおかしくなった？」

中2の弟、奏 そう まで冷たいことを言う。

「奏、冷たいなあ。おねーちゃんはそんなに勉強ばかりしてません。」

「だって、音々、部活もしないで塾行つてさあ、もちろん彼氏もないしで、めっちゃ暗い青春じゃね？」

かわいそうな子を見るような目で姉を見るな。

「…いたいとこ突いてくるねえ。」

たしかに、私の高校は県下でも有数の進学校。そんなところにまぐれで受かったフツの私は、めっちゃ努力しないとフツでもいられない。だからって勉強漬けもなあって、塾は行つてるものの、友達ともちゃーーンと遊んでる。彼氏はいないけど、今は別にいらないからいいの！

2こ下の弟、奏は、勉強もできて、スポーツもできて、そりゃモテる。バラ色の青春 絶賛謳歌中だろーさ。まあ、自慢の弟だけどねたぶん、私みたいに努力しなくても同じ高校に来れるだろうな。

「奏はいいよね。勉強もできるし、モテるし？私とは違うもんねー。」

「明るい生活を分けてあげたいよ。」

「いらない。ごちそーさま。」

おかーさま。今日もおいしいご飯をありがとう。

「はい。もう寝るの？音々？」

自分の食器を片づけている私に、お母さんが聞いてくる。

「ん、学校の宿題だけやってから寝るわ。今日はなんだか疲れちゃった。」

そう。あの変質者のせいで…！精神的ダメージだよまったく。

「わかったわ。じゃ、自分で飲み物持ってあがりなさいねー。」  
と、温かいミルクティーとクッキーの載ったお盆を手渡される。

「ありがとう。おやすみ。」

さっさと宿題終わらせて、早く寝たいわ。

## 遭遇（後書き）

勢いで書き始めてしまいました。  
読んでいただけて幸いです。  
ありがとうございます。

## 再会（前書き）

再会の王道です。

## 再会

あれから1週間。

特におかしなこともなく、いつも通りに時間は過ぎて行った。

…のだが。

まだまだ秋と言うにはあつつい日が続いている9月末。

何とも中途半端な時期に転校生が来た。

「あゝ、今日からこのクラスに編入になった永山朔　ながやまさく  
くんだ。みんな、よろしくな。」

先生と共に教室に入ってきたのは、あの変質者！あの時みたいに黒いマントはつけてないけど、確かにアイツだ！

今日は、こないだのように不機嫌な顔ではなく、むしろ柔らかい表情でみんなに挨拶している。女子の皆さんはなんだかざわついてるぞ？ま、見た目はいいもんね。いわゆる王子様みたいなの？

「じゃあ、あー、沢口の横、そうそう、三谷の後ろな。そこに座つて。わからないことがあつたら周りに聞けばいいから。教科書は沢口見せてやれ。」

「へーい。」  
手を挙げて返事をする沢口くんを目指して、彼はやってきた。

私は廊下側の後ろから2番目の席。沢口くんは最後列で私の斜め後ろ。

お約束の『隣』ってのは免れたけど、真後ろって…。

「よろしくね。」

私、沢口くん、そして私の隣の堂川菜実　どうかわまみ　ちゃんに  
につこりとあいさつする変質者、もとい永山くん。王子スマイルに  
なんてだまされないからね、わたしはっ！

「どしたの、音々？こっわい顔してるよー。せっかくカツコイイ男

の子が近くにきたっていうのに。うふふ。」

のほほんとした声で、茉実に指摘される。そりゃ険しくもなるわよ。こないだの今日だし。

でも、編入したてで変な噂流すのもどうだかと思うので、とりあえず自分の心ひとつに収めておくことにした。

「そーゆーことよりも、次算数でしょ〜！嫌いなんだもん。」  
と、誤魔化してみる。

「あはは。また算数とか言ってるし。今日は当たらないでしょ？」  
「ん、多分ね。」

茉実は、ふんわりとしたイメージの、女の子。肩の上でふんわり揺れるちよつと茶色がかったくせ毛と、くりくりパツチりお目がキユート。男女ともに人気高し。私とは、いつも仲良くしてもらってる。私はどちらかと言うとサバサバさくさくって感じかなあ？

茉実のかわいらしさで鋭気を補充して、気を取り直すと、そこへ永山くんが、

「三谷さんて、数学苦手なの？オレ、得意だからいつでも助けられるよ。」

って、爽やか笑顔で割り込んでくるな！

「あ〜、その時はお願いいたします。」

多分しないけどね〜。とりあえず空気を読んでさりと返事しておく。

「ほんと、三谷って数学の時間死んだ魚の目してるもんない。」  
と、沢口くんまで。もういいから。

「はいはい。もう朝のホームルーム終わるよ。算数の用意しなくちゃ。」

なるべく背後を見ないように、私は言った。

それから一日。

ほとんど永山くんと沢口くんと茉実とで行動することになってしまった。

沢口くんは学級委員だからっていうことで、慣れるまでのお世話係ということなんだけど、やるー二人ですつと行動するのはさすがにどうかと双方が言つて、仕方なくご近所さんの茉実と私まで巻き込まれてしまったのだ。

できるだけ関わりたくないのに！って、そんな心の叫びなんて誰にも届かず、かといって不機嫌でいるのもはばかられ、適当に合わせで適当に流すことにした。

でも、永山くんは結構目立ってた。

そりゃ自分で言い切るほどのカツコよさだもんね。行くところ行くところ女子の視線が痛かったわ。

そしてやつと放課後。

やっと変質者、もとい永山くん（しつこい）から解放される！と思ったのに

「みんな帰りはどっち方面？へえ、奇遇！三谷さん同じ駅だね！」ニコーっと笑顔付きで言われた。

ウソつけ。何が奇遇だ。今初めて知りましたーみたいなこと言ってこないだ落ちてたでしょうが。うちの近所で！

「えーそうなんだー！じゃあ一緒に帰ろうよ。私は駅までだけど。音々、今日は塾なかつたでしょ？」

って、茉実まで！なんで誘うかなあ…。塾があるからダメって言おうとしたのに、休みなのも暴露されてるし。  
万事休す。

「で、なぜうちのガツコに編入してきてるんでしょうか。」

「それはまあ、おいおいと。」

「で、なぜ私のガツコがわかつたのでしょうか？」

「そりゃもちろん、お前を張つてたからに決まってるんだろが。」

「…やっぱ、変質者…」

「それは違う。」

「じゃ、ストーリー。」

茉実と駅で別れた後。がたごとと電車に揺られながら。

まだ帰宅ラッシュには程遠い時間なので、ゆっくりと座れるのだけど、なぜか永山くと隣り合って座っている今の状況。2駅の我慢。永山くんの顔を見ることなく話す私と、長い足を組んでリラックスした感じの永山くん。

「てゆうーか、なんで私を張る必要があったのでしょうか。」

「それも、おいおい。」

「いえ、そんなおいおいっていうほど関わる予定はございませんので、早目にお願いたします。今すぐくらいの勢いで。」

「わかったけど、そのしゃべり方やめてくんない？よそよそしい。」

「いえ、それくらいの方がいいかと思えます。」

「いちお、クラスメイトになったんだからさあ、フツーに話せよ。」

そしたらいきさつも話してやるよ。」

「えええええ！脅しですか。」

「脅してねーだろ！」

こっちは必要以上に距離を縮めたくないのですがー。

「…わかったわよ。で、とりあえずもう駅に着いたんだけど、永山くんの家ってホントのところ、どこなのよ？」

「おまえんち。」

「はあああ？」

もう、頭痛くなってきた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2704ba/>

---

落ちていたのです

2012年1月7日22時49分発行